

中野香織

## ファッション歳時記

110

## 戻る・戻らない・戻れない……



カール・ヴェルネによる戯画(1793年)。革命前の78年(右)と革命後の93年(左)のファッション。ほんの15年でこれだけの違いが生まれた

イベント開催制限が緩和され、GOTOトラベルも全国区となり、自粛期間の静寂はいつたいた何だったのかと思うほど交通機関も街の中にもぎわいを取り戻しています。新型コロナウイルスの新規感染者数が激減しているわけでもないので、まだ慎重に行動する必要はありますが、コロナとともにある生活への人々の順応ぶりには、たくましさすら感じます。

表面上の活気はコロナ禍が始まる前に「戻った」ように見えても、「もう戻らない」ことも多々あります。私の生活においても、「戻った」こと、「戻らない」こと、「戻

れない」ことなどいろいろ列挙できますが、「戻りたくなくなった」ことの一つに、情性で続けていた美容の習慣があります。

まつげエクステやネイルカラー、ファンデから塗るフルメイクです。こうした美容施術を行う職業に携わっている方々には申し訳ないのですが、自粛期間中にネイルサロンもまつげサロンも通えなくなったことで「あ、つけなくても大丈夫」というモードに変わり、マスクと相性の悪いフルメイクも、しないほうが崩れを気にせず過ごせるといふ心境に変化しました。た

だ、ほんとに「何もしない」と見苦しくなっていますし、お世話になった美容関係者を失業させたくはないので、現在はスキンケアやネイルケアのためだけに伺います。レセプションもなくなったので、ハイヒールは履かなくなり、街着にもなるスポーツウエアの上下とスニーカーを買いました。コロナは変わるチャンスを与えてくれました。

この変化は何か似ているなと思ったり、そうだと、フランス革命を転機とするファッションのピフォア・アフターです。革命前のロココ時代には、西洋の女性は盛り上げた結髪に白い髪粉をつけ、ウエストはコルセットで縛り上げ、パニエというスカート拡張装置で極限まで下半身のボリュームを演出していました。しかし革命後は古代ギリシアに理想を求めた新古典主義スタイルへと激変します。髪は自然に下ろし、ドレスは人工的な下着をつけないリラックスしたシユミーズ型になります。

コロナのピフォア・アフターは、このようなフランス革命のピフォア・アフターになぞらえたくりますが、変化後のスタイルが定着するののかという点、怪しいのです。新古典の自然な美にすぐ飽きた女性たちは、また袖を脹らませ、髪を凝った結び方にし、量感のあるスカートのた



なかの かおり

1962年生まれ、富山市出身。服飾史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakano代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「「イノベーター」で読むアパレル全史」(日本実業出版社)、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」(吉川弘文館)ほか多数。

めに再び人工的な拡張下着を装着し始めます。装飾過多からミニリズムへ、それに飽きてまた装飾主義へと、ファッション史はぐるぐるらせん状に変化していきます。

そういう人間の行動原理を思うと、海外渡航やパーティーが解禁になるころには装飾主義が戻る可能性が大きいのですが、今のところ、その兆しは、女性よりもむしろ若い男性の間で見られます。男性がネイルカラーやメイクを楽しみ始め、コスメの発表会でも男性タレントがモデルを務めるといふ現象が出てきました。変わるチャンスのどさくさにまぎれて一気に進んだジェンターの偏見からの解放、これに関しては戻らないのいいと思います。おっと、男性がメイクを楽しむという点ではフランス革命前に戻っただけですね。